妹背の桜　－衣通姫伝説異聞－

ＴＯＭ－Ｆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妹背の桜　－衣通姫伝説異聞－

【Ｎコード】
Ｎ４３４５ＢＡ

【作者名】
ＴＯＭ－Ｆ

【あらすじ】
『いつも思っていた。この世のどこかに、私の半身がいる』　それは、日本の平安時代によく似た、ある世界のある時代のこと。衣通姫（そとおりひめ）と呼ばれる美貌の王女と、見目麗しく文武の才に秀でた皇太子がいた。その出会いは、運命の悪戯。『一夜限りのことにしたいと、お思いですか』　惹かれあう二つの魂、だがそれは、実の兄妹による禁忌の愛だった。動き出す運命の歯車と、浮かび上がる謎。『教えてよ、わたしは誰なの』　はじまりは、十五年前。『吾の新しい妻だ』　人々の想いは交錯し、やがて歴史を揺るがす大事件が起き

る。『ただちに討伐の軍勢を整えよ』　抗えぬ力によって引き裂かれる二人。『そばにいてくれるって、約束したのに』　それは、避けられぬ運命か、それとも仕組まれた悲劇か。そして、真実は封印され、伝説が残る。　※この作品は、ＦＣ２小説サイトと重複して掲載されています。

序（前書き）

この作品は官能小説ではありませんが、テーマとして近親相姦や近親婚を扱っていますので、お気に召さない方は閲覧をご遠慮下さい。

この作品には、古事記、日本書紀、源氏物語、伊勢物語のストーリーを混在させ模倣している部分があります。原作をご存知の方は、その部分もお楽しみ頂ければと思います。

序

秋月大王崩(かむあがり)りましし後、風花太子、日継知らしめすに定まれるを、未だ位に即きたまはざりし間に、その同母妹衣通姫(そとおりひめ)に奸(たわ)け、ここをもちて百官また天下の人ども、太子に背きて、安濃王子に帰(よ)りき。

ここに太子畏(かしこ)みて、兵器を備へ作りたまひき。安濃王子、軍を興したまひき。ここに太子を捕へて、伊予に流しまつりき。

その衣通姫、恋ひ慕ひ堪へずして追ひ往く。すなはち、共に自ら死にたまひき。

『本朝古記第一三巻・秋月伝』より抜粋。

序（後書き）

2～3日で1パートのペースで連載中です。完結は1月末の予定です。拙い作品ですが、よろしければ完結までお付き合い下さい。

ご感想・レビューなど頂けると幸いです。今後の励みにもなりますので、よろしくお願いします

1　（1）

満開の桜。

梢を照らす朧月。

風花（ふうか）は、ほうと一つ嘆息する。

なんと美しい……。

萌黄（もえぎ）の襲（かさね）と桜花の小袿（こうちぎ）に身を包み、妹背（いもせ）の桜を見上げる女。

白い肌、漆黒の髪、涼やかな瞳。それは、花の精か天女か。

……そう、いつも思っていた。

花を散らせる風に、女の髪が揺れる。

誘われるように、女がゆっくりと風花の方を向いた。

……この世のどこかに、私の半身がいる。

視線が合う。一瞬が、永遠だった。

心が呼び合う。

……ああ、やっと。

二人の口から、同じ言葉がつむぎ出された。

「あなたを、見つけた……」

1　（2）

突然、視界が真っ暗になった。柔らかな掌が、風花の目を塞いでいた。

「だーれ、だ」

若い女の声だった。少し語尾が上がる喋り方。うなじにかかる吐息がくすぐったい。

風花は、首を振って目隠しの掌を振り払う。そこには。

「見知らぬ女がいた」

鮮やかな花橘の襲と、花山吹の小袿。整った顔の中で、愛らしい目が無邪気に風花を睨んでいた。

「えー、酷いです」

風花は、再び桜の木に目をやる。

もう、あの女の姿はなかった。

風花は杯を手に取った。酒の上に、桜の花びらが一片浮かんでいた。

……いったい、誰だったのだろう。

「まるで花のような小袿だった。今宵の宴には、似つかわしい」

今度は、白檀の香りとともに、ひとりの男が隣に座った。上等な直衣（のうし）に身を包んだ精悍な男の顔は、ほんのりと上気していた。

「初瀬（はつせ）」

風花は、その異母弟に呼びかける。

「いったい誰だ、今の女は」

ここは、大王の居所である清涼殿の庭先だ。普通の女が、気軽に来られるような場所ではない。それなりに、身分のある者に違いなかった。

「そんなことは、こっちが聞きたいくらいだ。とんでもない美人だったな。
兄上こそ、熱く見つめ合っていたのに、知り合いではないのか」
「いや……」

初めて会ったはずだ。なのに、なぜか懐かしい。よく知っている人のように思える。
なにより……。

「おーい、橘花(きっか)のことは無視ですかー。せっかく、いいこと教えてあげようと思ったのに」

……すぐに声をかけるべきだった。
風花は後悔とともに、酒を飲み干した。

1　（3）

「うわ、自棄酒だ。橘花も呑もうかなぁ」
先ほどから、耳元で騒いでいる異母妹を一瞥する。

「お話し、聞いてほしいな」
風花の隣にちょこんと座り、橘花王女は風花が干した杯を差し出した。
酒を少し注いでやると、彼女はにんまりと笑った。

「で、なんだ」
風花が問うと、まあまあと生返事をしながらひらひらと手を振り、橘花は杯を空けた。

相手をしてもらえたことが嬉しかったのか、それから橘花は、後宮での恋愛話しや
市井に流れている噂話などを得意げに披露した。
「今夜の宴に、お父さまの大事な人も招かれているよ。大津の離宮から、ね……」

最後に、とって置きの情報を出して、橘花は薄い胸を張った。

「兄さん、今すっごく失礼なこと考えたよねっ」
妙に絡んでくる異母妹をなだめてから、風花は初瀬に用件を尋ねた。

「そうそう、忘れるところだった。兄上……いや、皇太子」
立太子の儀を終えたばかりの風花に、初瀬は改まった呼び方をした。急によそよそしく

なったようで、風花はその呼ばれ方がすこし嫌だった。

「いままでどおり、兄上と呼んでくれ。なんだか面映い」

「わかった、兄上。父上が舞をご所望だ」

そう言われてみれば、紫宸殿の方から管弦の音がかすかに聞こえてくる。

風花は、宴席を抜け出して、ついこの桜に見入ってしまったことを思いした。

1　（4）

彼らの父は、この御所の主にして、この国を統べる現人神の末裔。母親の出身地の名をとって秋月大王と呼ばれる、在位二〇年を越える偉大な王。その父が催した桜の宴であれば、皇太子の自分がいつまでも座を空けているわけにもいかない。

「舞ならば、おまえの方が上手だろうに」

風花は、立ち上がりながらそう言った。

「いやいや、紅葉賀の折に兄上が舞った青海波（せいがいは）は、いまだに人々の口の端に上っているのだ。あのときの兄上は、横で一緒に舞っていた俺も見とれたほどだった」

宴席に戻ると、大王から挿頭（かざし）の花が差し出された。

「来たか、風花。そなたは母に似て華がある。また、舞を見せてくれぬか」

大王の声は、どこか誇らしげだ。だが風花は、父の言葉を複雑な気持ちで聞いていた。

風花にとって母は、いないも同然だった。

母の名は、咲耶（さくや）という。その美貌が衣服を通してでも輝くように見えることから、衣通咲耶とも呼ばれる女性だ。

今上大王の最愛の后でありながら、ずっと近江大津離宮に隠棲しているため、その姿を知っているものはほとんどいない。息子の風花ですら、昨日、十年ぶりの面会を許されたくらいだ。それも、日光に弱いという体質のため、夜間のしかも御簾越しの対面だった。だから風花の記憶の中では、母は最後に見た十年前の姿のままだ。

風花は花を受け取ると、春鶯囀（しゅんおうてん）の舞をゆったりと舞って見せた。

宴席に集う人々から、いっせいに嘆息が漏れた。

「なんと華やかな。桜の花も、霞んで見えますな」

「文武両道に優れ、しかも、あのとおり見目麗しい」

「どのような姫君を娶られるのか。ああ、私にも娘がおれば」

風花は、臣下の追従口を聞き流して席に戻る。

「あいかわらず、たいそうな人気ですな。皇太子」

横の席の威丈夫な男が、杯をあおる。すでに、顔全体が赤い。

「安濃（あのう）兄上、少々酒が過ぎるのではありませんか」

なあにこれしき、と言ってその異母兄が袖をまくる。赤銅のような腕が現れた。同時に、ぐらりと上体が傾く。

「大臣どもに付き合って、いささか飲みすぎたようだ」

「兄上、差し出がましいが、臣下の者たちと親密になりすぎぬ方が良いのではないか」

「わかっている。……ああ、苦しい。先に下がらせて頂こう」

そう言い置いて、安濃王子は席を立った。

2 （1）

春、弥生。
望月にかかる暈（かさ）。
薄紅の花弁。
咲き誇るは、妹背の桜。
願わくば、花の下にて……。
それは、誰の想いだっただろう。

花散らしの風が、わたしの髪を揺らせる。月光に縫い止められていた
わたしの運命が、揺れて動き出す。

あなたは、だれ。
わたしを見つめる、その眼差しは熱く激しい。その姿は、白く美しい。

わたしは……。
あなたを想っても、いいのでしょうか。

叶わぬ想い。
けして許されぬ思慕。

今にもあふれ出し、すべてを飲み込んでしまいそうなわたしの心を、
あなたなら受け止めてくれますか。

わたしは……。
あなたに触れても、いいのでしょうか。
この身に深く刻まれ、この身を満たす穢れで……。

あなたを汚しても、いいですか。

2　（2）

夜は、すっかり更けていた。

春の朧月が、中空で霞んでいる。

午後から続いた花宴もおひらきとなり、御所は余韻を残しつつも静まり
はじめていた。

風花は、清涼殿にいた。久々の深酒に酔っているが、このまま眠るには
惜しい夜だ。

橘花の話しによると、母が、昨夜は顔も見られなかったあのひとが今夜は
御所にいる。できることなら、今度は顔を見て話したい。聞いて欲しいことが、
たくさんあるのだ。

風花は、意を決して昨日面会した藤壷へ渡ってみたが、すでに寝殿の格子は
下ろされ戸締りは行き届いていた。

今宵は無理か。それなら、せめてあの女にもういちど出会えないものか。

風花は、弘徽殿に足を向けた。こちらはまだ格子も妻戸も開いていたので、

そっと庇に忍び込み物陰に身を隠す。
やがて、衣擦れの音とともに、鈴の音のような女の声が聞こえてきた。

「照りもせず、曇りもはてぬ、春の夜の……」
声の方向を伺うと、扇をかざした女が、ほの明るい月光を浴びて佇んでいた。
「朧月夜に、似るものぞなき」

桜花の小袿。

あのひとだ。
風花の胸が大きく弾む。
ああ、待っていた甲斐があった。ここで、出会えるとは。

風花は、足早に近づくと、女の袖を掴んで抱き寄せた。

2　（3）

「あっ……」

女の口から、かすかな吐息が漏れる。その身体からは、優しく甘い香りがした。香の匂いではなかった。

「ひどいことをなさるのね。誰か……」

助けを呼ぼうとする女の唇を、風花は自分の唇で塞いだ。

「……んっ」

その瞬間、風花の中で何かがはじけた。

女は、怯えたように身を硬くしている。

唇を離した風花は、激情のほとばしりをなんとか押さえながら、女に語りかけた。

「静かにして。……桜の下で、出会いましたね」

はっとしたように風花を見た女の身体から、強張りが消えていった。

風花は、空いていた小部屋に女を連れ込み、襖障子を閉めきる。いつもなら、こんなに乱暴に事を運んだりはしないのだが、このときは自分でも逆らえない何物かが、風花を突き動かしていた。

「あ……。あなたは？」

「今上大王の王子で、風花と申します」

名前を聞いて、女はすこし安心したようだった。

風花の忍耐は、限界に来ていた。
もう一度、激しく唇を重ねる。
女も拒む様子はなく、ためらいがちにも風花の求めに応じた。
吐息が熱を帯び、それとともに強くなる芳香が、風花の理性を奪っていった。

2　（4）

庇の格子が、かすかに白くなってきた。
そろそろ、夜明けも近い時刻だ。

風花は、けだるいまどろみの中にあった。
それは、夢うつつのような一夜だった。何度も、身体を重ねた。すべてを与えつくし、すべてを与えられた、そんな満足感があった。いままでの経験は、この人と愛し合うためにあったのだと思えた。

女が、立ち上がって着衣の乱れを整える。その仕草も、優雅なものだった。
風花は、慌てて声をかける。
「待って。どうか、名を明かしてください。またお会いしたいのです」

女は、無言で首を横に振る。長い髪がさらりと揺れる。なぜ、今更拒むのか。
「一夜限りのことにしたいとお思いですか。私は、そんなつもりで貴女を求めたのではありません」
なにをむきになっているのか、風花は自分でもわからなかった。

だが、それ以上に、女の見せた反応は意外だった。風花に向き合った
その目が、険しい光を帯びていた。
「それは、わたくしも同じことです。誰とでも褥を共にするような女だと、
思われたくはありません」

女の言葉に、風花はたじろぐ。見た目のなよやかで儚げな印象とは反対に、なかなか芯は強そうだ。

「では、なぜ」

「故あって、わたくしは名乗れません」

女は、強情だった。

2　（5）

「あなたとは、浅からぬ縁を感じる。なのに、あなたは朝露のように私の前から消えてしまうという。名前が分からなければ、訪ねていくこともできない」

「わたくしが名前を教えないまま、あなたの前から消えたとしたら、草を分けてでも探しては下さらないというのですね。それなら、わたくしの
ことなど儚く消える草の露と思って、このままお忘れください」

なんという切り返しか。風花は、言葉に詰まる。

「……これは、私の方が言い方を間違えました。私があなたを探し回る
ようなことをすれば、やがてはそのことが人の口の端に上るでしょう。
つまらない噂話が、あなたを傷つけるかもしれない。私は、あなたのことが
大事なのです」

風花の言葉が終わらないうちにも、殿中に人の気配がしはじめた。女房たちも、そろそろ起きだしてきたようだ。早く退出しないと、人の目に留まってなにかと面倒だ。

「ならばせめて、扇を取り替えてください。これは、私の気持ちとして。
そちらは、この出会いの証として」

風花の申し出に、女はようやく頷いた。

「夜桜の君。必ず、あなたを見つけ出すよ」
風花はそう告げると、名残を残したまま退出した。

2　（6）

午前から始まった後宴の間も、風花の心は、あの美しい女のことでいっぱいだった。

私を拒んでいる様子はなかったのに、便りをする方法を教えてくれなかった。

本気でないのなら忘れて欲しい、か。あれは、私を相手に恋の駆け引きを仕掛けてきているのだろうか。

それにしても、いったい誰だったのだろう。

いままで風花が出会った女性が、すべて色あせて見えるほどの相手だった。あれほどの美貌と才気でありながら、人々の噂にならないのも
不思議な話しだった。

いずれにしても、あの女が相手なら、本気になってもいいと思う。もう、彼女に惹かれていく自分を止められそうもなかった。

やがて、後宴も終わり、皆が御所から退出しはじめた。

風花は、それとなくあの女の姿を探したが、客の中には見つからなかった。そうなると、御所にいる者のうちの誰かだということになる。

風花は、清涼殿の渡り廊下で見かけた橘花に声をかけた。

2（7）

「昨日の花宴に、私が知らない女性がいた」

橘花は、にこりと笑って、自分を指差す。

「おまえじゃない」

「えー。昨日は、そう言ってたのに」

そっぽを向いて膨らませた彼女の頬を突いて、こちらを向かせた。すこし不機嫌そうな表情だったが、そこは無視しておく。

「妹背の桜の下に、立っていただろう？　おまえは、見なかったのか」

「うん……」

「とても美しいひとで、萌黄襲に桜花の小袿を着ていた。誰だろう」

「え、それだけ？」

「これも、ある」

風花は、手元の扇を広げて見せた。桜の三重がさねで、色の濃い方に霞む月が描かれており、それが水面に写るという趣向の絵柄だ。ありふれた図柄ではあるが、まさしくかの女性を象徴するものだと風花は思った。

橘花は、それを小さな手で弄ぶ。

「いいものだよ、これ。こんなの、橘花も持ってない。でも、なんで兄さんが、女物の扇を持ってるの……」

「それで、心当たりは？」

一瞬ためらったあとで、橘花が首を振る。

「なくは、ない。でも……」

なぜか言葉尻を濁して、話しにくそうにしている。橘花にしては、めずらしいことだった。

「いや、いいんだ。引き止めて悪かったな」

そう言いながら、風花は橘花の髪を軽く撫でた。いつもなら、くすぐったいよとおどけるはずの橘花が、びくりとその身体を強張らせた。

「あ……やだ。……どうして」

戸惑いの眼差しを風花に向けたあと、橘花は俯いた。細い肩が、小刻みに震えていた。

2　（8）

薄暗い蝋燭の明かりの中で、衣装を整える女性の後姿を、わたしは横になったままで眺めていた。

女たらしの男に関わったおかげで婚期を逃し年増になってしまったというのが、彼女の口癖だったが、その身体は同性のわたしが見てもまだまだ瑞々しく美しいと思う。

そんな彼女を見ていると、身体の芯にある残り火が、また熾りはじめ
そうになる。感度を増した肌に触れた夜具が、くすぐったかった。

「……ねえ、内侍」
わたしが話しかけると、彼女は驚いたようにこちらを見た。
「お目覚めでしたか」
「ごめんね、いつも。貴女に、こんなことまでさせてしまって」
内侍は、そっと首を振る。

「お気になさらず。今日も、とても可愛らしゅうございましたよ。
……
ご心配なさらずとも、あなたさまなら、どんな殿方でも愛して
くださるはずです」
さすがだな、と思う。なにも話していないのに、わたしの悩みを
見抜いて
いたとは。
わたしの衣装を整えてから、内侍は退出した。

花宴から、半月が経った。

あれが運命の出会いだというのなら、まさしくその通りだろう。
ずっと
探していた、自分の半身に出会えたと思った。そしてその出会いは、
この
心と身体に深く刻まれた。けれど、わたしには……。

不意に、あのひとの顔が浮かんだ。

あのひとは、いつも変ることなく、大きな愛を注いでくれる。そ
して、
あのひとに抱かれているわたしは、確かにこのわたしなのだ。

そう、わたしにはあのひとがいる。いままでも、そしてこれから
も。

あのひとだけがいれば、それでよかった……。

えっ。

わたしは、軽い眩暈を覚える。

よかった……って、なに？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4345ba/

妹背の桜　－衣通姫伝説異聞－

2012年1月14日12時46分発行